

兵庫県立歴史博物館紀要



第 34 号

姫路藩士・下田桂屋と文人画家・浦上春琴 —『桂屋遺稿』にみる文雅の交わり—	山口奈々絵 1
【資料紹介】明治期の広告契約に関する文書	吉原 大志 11
【資料紹介】「城郭巡視日記」(二)	竹内 信 19
【報告】改修工事期間中における博物館資料の保存環境について	山口奈々絵 吉原 大志 30(39)
【活動報告】2021 年度れきはく連続講座 「野里界限まち歩き講座」の実施について	鈴木 敬二 38(31)
【活動報告】博物館における展示情報の提供と博学連携 —“ひょうご五国”歴史文化キャラバン 赤穂会場の取り組みを事例に—	竹内 信 前田 和彦 48(21)
【展覧会記録】巡回展「“ひょうご五国”歴史文化キャラバン」について	香川 雅信 50(19)
大坂仏師「宮内法橋」と 神出仏師「厚木民部・保省」の作例、修理例表の修正	神戸 佳文 68(1)

2023(令和5)年3月

兵庫県立歴史博物館

【展覧会記録】

巡回展「“ひょうご五国” 歴史文化キャラバン」について

香 川 雅 信

1 開催の趣旨と経緯

当館は、施設・設備の大規模改修工事のため、令和3年（2021）9月6日から令和5年（2023）4月初めまで休館することになったが、その間の活動として、県内の博物館・資料館を会場とする巡回展を開催することになった。当館の存在を忘れられないよう、館は「休んでいる」のではなく、異なる形で活動を行っているのだということをアピールする意味で、休館期間中の活動のなかでも最も大きなものであった。

当館の運営懇話会の場で、摂津・播磨・但馬・丹波・淡路の旧五国から成る兵庫県全体の歴史を俯瞰した展示の必要性が求められたことから、再開館後は「ひょうご五国」を念頭に置いた新しい常設展示を設けることとしたが、そのいわばテストケースとして、この巡回展も同様の視点から、兵庫県の歴史・文化をわかりやすく提示することを目指すこととなった。

そこで、巡回展のタイトルを「“ひょうご五国” 歴史文化キャラバン」と銘打ち、会場についても旧五国それぞれの地域をすべて巡回するという形で開催することとした。令和3年度は摂津・播磨の2会場をまず巡回し、4年度はあらためて摂津・播磨・但馬・丹波・淡路の5会場を巡回するという形で調整することになった。人口が多く、博物館・資料館の数も多い摂津・播磨は2回巡回する形になるわけである。

調整の結果、巡回する会場と会期は下記のとおりとなった。

令和3年度

摂津：尼崎市立歴史博物館

令和4年1月8日（土）～2月6日（日）

播磨：三木市立みき歴史資料館

令和4年2月19日（土）～3月21日（月・祝）

令和4年度

但馬：豊岡市立歴史博物館

令和4年4月29日（金・祝）～6月14日（火）

淡路：洲本市立淡路文化史料館

令和4年7月16日（土）～8月21日（日）

播磨：赤穂市立歴史博物館

令和4年9月10日（土）～10月18日（火）

丹波：丹波市立柏原歴史民俗資料館

令和4年11月12日（土）～12月18日（日）

摂津：兵庫県立兵庫津ミュージアム

令和5年2月4日（土）～3月5日（日）

2 展示内容について

巡回展の内容については、旧五国のそれぞれの特色を示す資料、および近代になって五国が「兵庫県」として統合され、歩んだ歴史のなかでトピックとなる資料を紹介する「基本セット」の部分と、会場となった地域ゆかりの資料を展示する「会場限定」の部分の二段構えとした。

「基本セット」は、まず古代における旧五国の成立を物語る木簡や「播磨国風土記」のレプリカを展示する「五国の成立」、旧五国それぞれの仏像の代表例をレプリカで紹介する「五国の仏像」、摂津の三田焼、播磨の東山焼、但馬の出石焼、丹波の丹波焼、淡路の珉平焼といったやきものを紹介する「五国のやきもの」、播磨の毛獅子、但馬の麒麟獅子、丹波の「お山の神事」、淡路の人形浄瑠璃といった民俗芸能を紹介する「五国の民俗」、初代兵庫県知事・伊藤博文の大礼服や明治初期の双頭レール、マッチ棒の姫路城や降伏文書調印に使用した万年筆など、近現代のさまざまなトピックについて触れた「ひょうごの近代」、館蔵「高橋秀吉コレクション」の古写真や、民家と町並みを描いた風景面で五国それぞれの懐かしい風景を紹介する「五国の風景」という6つのコーナーで構成した。ただし、会場によっては広さや展示設備の関係で、すべてのコーナーを表現することが難しく、「基本セット」の一部を割愛したり、また独自の展示構成になったりすることもあった。

「五国の仏像」と「五国の民俗」に関しては、常設展示で使用している資料を展示物として出品した。つまり、通常時であれば当館以外の場所では見ることのできない資料が、館外で展示されたことになる。そして、多くの会場で来館者に最も

喜ばれたのは、このコーナーの資料であった。とりわけ仏像はレプリカではあったが、本物は常時見られる状態になっているわけではなく、それを間近で見ることができるということもあって、たいへん好評であった。よくよく考えてみると、これらは当館に来ていただければいつでも見られるはずのものなのだが、それが各会場で喜ばれたということは、これらの資料が当館に常時展示されているということが多くの県民の方々に知られていないということを逆説的に示しているといえる。その意味で、今回の巡回展は館のPRのよい機会になったということがあらためて思い知らされた。

それとは対照的に、「マッチ棒の姫路城」や「降伏文書調印に使用した万年筆」など、普段あまり展示する機会がなかった珍品を紹介することができたのもよかったといえる。とりわけ後者は、昭和20年（1945）9月2日に戦艦ミズーリの船上で行われたアジア太平洋戦争の降伏文書の調印式で、参謀総長梅津美治郎が実際に使用したとされるもので、日本の歴史上の重大な瞬間に立ち会った貴重な資料といえるが、平成12年（2000）に当館に寄贈された際に展示したきり、これまであまり展示する機会に恵まれなかった。実は令和2年（2020）に終戦75年を記念して、ハワイの真珠湾で記念艦として保存されているミズーリの船上で行われる展示会に出品されるはずだったが、コロナ禍のため中止されてしまったということもあった。今回の巡回展は、そうした資料を広く県民の方々に紹介する絶好の機会となった。

また「会場限定」の展示物として、会場となった地域ゆかりの資料を館蔵品のなかからピックアップして紹介したが、これは普段、当館の収蔵庫に眠っている資料が、ゆかりの地域に「里帰り」したともいうことができ、これも地元の方々に喜ばれた。例えば尼崎市立歴史博物館での展示では、「尼崎町著名商店聯合案内双六」という、明治42年（1909）の尼崎の商店の広告をマスにした双六を展示したが、それをプリントしたクリアファイルが欲しいという声があった。

3 成果と課題

当館が姫路に所在するということが、こちらが考えている以上に県民の方々に知られていないということは、これまでもしばしば指摘されていた。それは広報不足や大阪・神戸からの心理的距離などに起因するものであったが、有効な打開策

を講じることができずにいた。しかし今回、巡回展という形で、いわば県立歴史博物館自体がみずから外に出て、離れた地域で館の存在や所蔵品をアピールするという試みは、それなりに効果的だということが明らかになったといえる。

また、現在、当館の学芸員は世代交代が進み、30代以下の若い学芸員が大きな割合を占めるようになっているが、そうした世代が館の外で展示を行うということは、得がたい経験になったと推察される。いつもと勝手の違う現場で展示を行うにあたっては、臨機応変の対応が要求される。それは館内での展示では得られない経験であり、間違いなく学芸員としてのスキルを上げるための糧となったと期待する。

さらに、赤穂市立歴史博物館での展示では、音声ガイドやQRコードを用いた補助解説、ワークシートなどを試験的に導入したが、これは再開館後の新たな常設展示の「予行演習」として大いに意味のある試みであった。これも若い学芸員が積極的に提案し、実現したものであったので、その点でも今回の「“ひょうご五国”歴史文化キャラバン」が館の活動に及ぼした影響は小さくない。

一方で、他館を会場として館の活動を行うことの難しさも、今回、身に染みて感じるようになった。とりわけ難しかったのは展覧会の広報である。会場となる地域が離れているため、普段の展覧会に際して使っている広報ルートを活用することができず、ほぼチラシ配布のみの広報となり、周知が十分にできなかった。アンケートでも、「もっとPRすればいいのに」という意見がどこの会場でも多く見られることになったのは、非常に残念であった。

また、館蔵資料の県内巡回展が持つ意義が今回、証明されたといえるが、再開館後は、館内での展覧会を開催しながら、年度内に複数の会場を巡回するような展示を実施するのはあまりに負担が大きい。同じような形での巡回展を今後も継続していくことは難しいと思われるが、より簡素な形での巡回展を、年に一度のペースで行うという形で、準備を進めているところである。



尼崎市歴史博物館での展示解説の様子

執筆者紹介（掲載順）

山口 奈々絵（当館学芸員）

吉原 大志（当館学芸員・主任）

竹内 信（当館学芸員）

鈴木 敬二（当館学芸員・館長補佐兼事業企画課長）

前田 和彦（当館指導主事）

香川 雅信（当館学芸員・学芸課長兼県立美術館課長）

神戸 佳文（当館学芸員・社会教育推進専門員）

兵庫県立歴史博物館紀要
塵界 第三四号

編集 兵庫県立歴史博物館
印刷 合名会社 柳生印刷所
発行 令和五年三月二十七日

Printed in Japan©2023

04 教①1-017 A4

〈訂正〉

『塵界』第33号

75（38）頁

（誤）No.1039 金の船 第4巻第6号（6月号）

（正）No.1039 金の星 第4巻第6号（6月号）

91（22）頁 『金の船』解説 7～8行目

（誤）新たに金の船社を主宰するにあたって『金の星』と誌名を変更、

（正）新たに金の船社を主宰し、『金の星』と題する別雑誌を発刊する（巻号は『金の船』を踏襲）。

※キンノツノ社からはその後も『金の船』の発行は継続されており（のちに発行者は越山堂を経て、資文堂書店へと変わる）、二誌が併存する期間が続いていた。